

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04548

研究課題名(和文)日本の小学校にみられる移民の子どもの儀礼的行為に関する社会学的質的研究

研究課題名(英文)A sociological study of immigrants ritual in elementary school in Japan

研究代表者

森 みどり(高松みどり)(Midori, Mori/Takamatsu)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20626478

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、不登校に陥ってしまった日系ブラジル・ペルーの子どもの集団への帰属プロセスを、ヘネップのいう「(通過)儀礼」という視点から分析した。その結果、「通過儀礼」として機能している場合と、そうでない場合が見られた。たとえば、ある子どもは、担任教師に授業中、教室内に様々なグループ活動の機会を提供してもらうことで、学級に所属できていた(通過儀礼が機能した例)。また別の子どもは、授業中よく寝ていたにもかかわらず、担任教員がそのサインを見逃していたことから不登校に陥る要因の一つとなっていた(通過儀礼が機能しなかった例)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

管見する限り、(通過)儀礼の視点から、とりわけ外国籍児童の学校での集団適応プロセスについて(集団不適応プロセスについて)考察した研究は、日本で皆無である。

近年、ますます増加する外国籍児童の集団帰属のプロセスを、教員が儀礼という視点から捉え、配慮して学級経営を行うことで、不適応の子どもを少なくするのに寄与すると思われる。本論文でも、班活動・係活動などのグループ活動を学級で増やすこと、クラブ活動や日本語授業の時間帯の集団にアイデンティファイするかもしれないため、こうした時間帯を重視すること、日々ふりがなをうつなどの教材の工夫を凝らすこと、など、担任教師(日本語教員)として配慮すべき点を指摘した

研究成果の概要(英文): I observed the processes of belonging to groups through the example of a Brazilian and a Peruvian child from a perspective of rite of passage. It became clear that there was one case in which the rite of passage was functioning and one case where it did not work. Because the class teacher created many opportunities for group works thereby ensuring a good functioning rite of passage.

Another child could not belong to the classroom because a teacher ignored the warning signal of this child who slept in class indicative of a not functioning rite.

研究分野：教育哲学

キーワード：儀礼 通過 外国籍

## 1. 研究開始当初の背景

近年、日本では、外国人労働者や外国籍児童がますます増加している。とりわけニューカマーと呼ばれる日系ブラジル人・日系ペルー人は、増加する一方である。そこで「通過儀礼（ヘネップ）」という視点から、とりわけ日系ブラジル人・日系ペルー人の子どもが、どのような相互行為の型（儀礼）を機に日本社会の共同体に入るのか、またどのような規範を身につけるなかで構成員となっていくのか考察しようと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、以下の問いを明らかにするために行われた。

- (1)「日系ブラジル・日系ペルーの子どもの学校での望ましい統合の形とはどのようなものか」
- (2)「ルーツとなる文化を捨て日本文化へと『同化』させる形態は彼らにとって善いことか」
- (3)「なるべく彼らの『他者性』を担保した形で、うまく日本文化と共存できる形はないのか」

以上のような問題の解明と並び、「通過儀礼（ヘネップ）」の視点の有効性を確認することもまた、研究当初の目的であった。

## 3. 研究の方法

すでに筆者が拙稿 [のなか](#)で筆者が扱った、文化人類学・社会学の儀礼研究の視点を、解釈モデルとして用いた。とりわけヴルフがドイツで行ったような儀礼研究を参考にし、文化人類学者、ヘネップの「通過儀礼」という概念から、日系ペルー国籍の子どもや日系ブラジル国籍の子どもの発言を解釈した。拙稿 [では](#)、すでにオチャンテが調査した子どもの発言を基に、児童生徒たちが不登校に陥った事例を取り上げ、家庭から学校への「通過儀礼」（学校や学級という日本人社会への「加入儀礼」）が機能した例と、機能しなかった例として分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 通過儀礼が機能しなかった例

まず中学校3年生の夏休みを挟み4ヶ月間学校を欠席したA（男性、ペルー国籍、20歳、日本生まれ、職業：非正規雇用、最終学歴：高校中退）の例を取り上げる。以下、若者の発言は、斜体で記すこととする。

*「最初は毎日行っていました。でもその後欠席するようになった。学校に行きたくなくなりました。...3年の時、4ヶ月も欠席した。面白くなかった。ここにいたくないと思った。」*

*（「それは学校ですか。日本ですか。」というインタビュアー、オチャンテからの問いに対し）、「日本。学校は大丈夫だったけど、話す人がいなかったのが嫌だった。先生からの手伝いがあったけれど、頑張ろうと思えるほどではなかった。2、3時間取り出しがあったけれど、その後はずっと日本人と一緒にいて、あまり話しができなかった。」*

（「先生からの手伝いがあったけれど、頑張ろうと思えるほどではなかった」）を見れば、イニシエーター（先導者）はイニシアント（儀礼参加者）にまずは認められなければ、通過儀礼を行

うことすらできない、ということが分かる。逆に言えば、イニシアントはイニシエーターに対する敬意が十分なものでなければ、その通過儀礼に参加することすらしないのである。さらに、Aの場合、「話す人がいなかったのが嫌だった」・「あまり話しができなかった」からも分かるように、学級という共同体の構成員からも放置されたため、(その共同体に属したい)という気持ちがなくなり、学級にアイデンティファイできなくなってしまったのであろう。

(「学校に行かないときは何をしていた」というオチャンテからの質問に対し,)「ずっと遊んでいました。」( 29 頁)(「親は何も言わなかったの?」という問いに対し,)「彼らはずっと働いていた。7時に出て、(夜の)8時か9時に戻っていたので学校から電話があった日まで気づいていなかった。でない気づかなかっただろう。」( 29 頁)

「授業中ではよく寝ていました。しかし先生が何も言わなかった。関心はなかった。取り出し授業では、日本語の勉強をしていたし、先生と話したり、真面目に受けていました。」( 30 頁)(取り出し授業では勉強していたけれど、学級ではあまり関心はなかったの?何故?という質問に対して,)「理解できなかったから。そして先生も説明しようとも努力しなかった。」

上で A が「先生からの手伝いがあったけれど、頑張ろうと思えるほどではなかった」と述べていたのは、「先生が説明しようとも努力しなかった」ということがここで明らかとなる。日本の教師は多忙であるため、上述の教師も他の業務に追われ、詳細に説明できなかったかもしれないが、少なくとも A の語りのこの部分を見る限り、外国籍の児童生徒には、学習内容を詳細に説明する努力が教員側に求められることがわかる。

オチャンテは、A が学級では授業中よく寝ていたにもかかわらず、「先生が何も言わなかったことから、教員が自分に対して無関心であると感じるようになり、学習意欲も失われた」と解釈しているが、このことは、A がそこにいるの見過ごしている(Aからのサインを見逃している)と捉えることもできる。こうしたイニシエーター(教員)の態度が A を失望させ、通過儀礼に参加できなくなった状況と解釈できるだろう。

こうして A は高校中退してしまうが、こうした彼の発言は、(家庭から学校への)「通過儀礼」(学校や学級という日本人社会への「加入儀礼」)が機能しなかった例として解釈できるだろう。学級という共同体において、担任教師は「イニシエーター」になれていない。家庭から学級への通過儀礼(日本の学校のクラスへの「加入儀礼」)がなく、クラスメートとしてのアイデンティが抱けずに、不登校に陥ったケースであるといえよう。

## (2) 通過儀礼が機能した例

C(男、ブラジル国籍、33歳、12歳の時来日、職業：行政書士、最終学歴：大学)は以下のように語る。

「同じ中学校にいた従兄弟はドロップアウトしたけれど、自分のクラスの担任の先生が、教室で自分を受け入れるために様々なグループ活動を行ったり全体で支える仕組みを作ったりしてくれたため、中学校生活を楽しく過ごした。」( 30 頁)

オチャンテは、Cの語りを次のように解釈している。「学習が困難な生徒に、教室の中でできる小さな支援、ルビふり、声かけ等を行い、学級の一員としての所属感を持たせ、仲間作りを支援することで、学習意欲を向上することができるのではないかと考えられる。」(30頁)

通過儀礼という視点から、とりわけ「教室で自分を受け入れるために様々なグループ活動を行ったり」という部分は、担任教員が意図的に「通過儀礼」(とりわけヘネップのいう統合儀礼)を用意し、成功したと解釈することができるだろう。

すでに述べたように、通過儀礼は学校の様々な共同体に子どもを所属させるが、ここでは、さらに細かい、学級の中の集団(「活動を行うグループ」)が、帰属される共同体となっている。Cは「グループ活動」という「通過儀礼」によって、自分のグループに分類され、それが繰り返されることで、そのメンバーとしてのアイデンティティを抱けるようになったのであろう。

ここから分かることは、オチャンテの言葉どおり、今後は、教員が「教室の中でできる小さな支援、ルビふり、声かけ等」をすることで、外国籍の子どもが「敷居(ヘネップ)」を乗り越える手助けができるかもしれないということである。

### (3) 結論

以上のように、学校生活を思い起こして語る、日系ブラジル・日系ペルー人の語りには、通過儀礼が機能している場合と、機能していない場合が見られた。今後、学校側に注意してほしいこととして、第一に「コムニタス(ターナー)」が発生するかもしれないような、外国籍児童生徒同士の関係を大切にすること(たとえば日本語の取り出し授業など)。第二に、周囲の児童生徒がスティグマとして捉えないために、外国籍児童生徒の違いや特徴をポジティブに捉えること。第三に、イニシエーターとしての信頼を得るために、ルビふりや声かけといった、日常的な努力を忘れず、授業中寝る子どもには(なんらかのサインかもしれないので)注意すること。第四に、(グループのメンバーとして外国籍の児童生徒がアイデンティファイできそうな)グループ活動を行う(ヘネップのいう小規模な「統合儀礼」を行う)こと。第五に、日本語取り出し授業や、クラブ活動の集団にアイデンティファイする(自分の居場所であると感じる)子どもがいるかもしれないので、積極的に参加を勧めること。少なくとも教師がこうした潜在的な儀礼の存在を意識することで、今後、外国籍児童の指導方法が変化するのではなかろうか。

### (4) 本研究の位置づけ

本研究は、「(通過)儀礼」という視点から外国籍の人々の統合問題、とりわけ彼らの社会化プロセスを解釈した、唯一の日本の研究である。本研究を除いては、こうした類の研究は、管見の限り、皆無である。類似する研究として、鈴木・ヴルフらによる、ドイツのクリスマス・日本の正月に関する儀礼研究は存在するものの、彼らは外国籍の人々をそもそも対象にはしていない。また、オチャンテによる研究もまた、本研究と類似するものの、彼女は儀礼という視点から外国籍の若者の語りを解釈するわけではない。

国外、とりわけ筆者の研究対象であるドイツ語圏の研究では、儀礼という視点をを用いた、学校

研究は、ヴルフ 以外には、ほとんど見られない。以上の理由から本研究は、「文化人類学や社会学における儀礼論から見た、外国籍児童の適応プロセスに関する(とりわけそのアイデンティティに着眼する)研究」として位置づけることができるであろう。

#### (5) インパクト

文化人類学・社会学・教育哲学の三つの学術分野にまたがる本研究は、学際的である。また(近年ますます増加する)外国籍児童の受け入れの問題として、アクチュアルでもある本研究は、教育哲学界に計り知れない影響を与えることが予測できる。

#### (6) 今後の展開

日系ブラジルや日系ペルーの子どもたちは、「あなたはブラジル人である」、あるいは「ペルー人である」という形で、国家からアイデンティティがすでに付与された状態であるといえる。よってそれを基盤に(あるいはそこから距離を取る形で)日本の共同体(学校・学級など)で比較的安定したアイデンティティを持ちやすいと考えられる。しかしながら現在、世界には、少数民族の人々に対する国籍法上の差別があるとき、国家が独立した際それまでの住民の一部が国民として受け入れられない場合や、関係国の法が対立し相容れないといった理由で国籍のない人々が推計 1200 万人存在するといわれる。日本にも推計千人を超える無国籍の人々がいるといわれるが、無国籍の子どもは、いわば「国家からのアイデンティティ」が付与されていないため、そのアイデンティティの構築も、拠り所となる基盤のない「ゼロ状態」からスタートせざるをえない状態といえるのではないか。よって今後は、この点について解明すべく、こうした無国籍児童生徒のアイデンティティや統合についても考察の対象に含めたいと考える。

#### <引用文献>

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス「公立の小・中学校の不登校・不適応における生徒児童の課題 外国人児童生徒の困難な体験からの考察」『奈良学園大学紀要』第5集 2016年。

拙稿『教室のドラマトウルギー』北樹出版, 2014年。

高松みどり・森征樹「どのように外国籍の子どもを日本社会(学校)に統合するのか」、『実践学校教育研究』, 2020年, 27~36頁。

鈴木晶子・クリストフ ヴルフ『幸福の人類学 クリスマスのドイツ 正月の日本』ナカニシヤ出版, 2013年。

Christoph Wulf, Birgit Althans, Kathrin Audehm, Constanze Bausch, Michael Göhlich, Stephan Sting, Anna Tervooren, Monika Wagner-Willi, Jörg Zirfas: *Das Soziale als Ritual: Zur performativen Bildung von Gemeinschaften*, Leske + Budrich, Opladen, 2001.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高松みどり・中井精一	4. 巻 67
2. 論文標題 ESDの実践とこれからの教育,ESDの展望(1)大学教育(高等教育)でのESDのあり方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 人文社会科学・自然科学	6. 最初と最後の頁 149, 165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高松みどり・森征樹	4. 巻 21
2. 論文標題 有害「コミック」の表現規制に関する一考察 マンガメディア規制プロセスへの着眼	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実践教育学研究	6. 最初と最後の頁 21,30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Midori Mori	4. 巻 1
2. 論文標題 The Dramaturgy in a Classroom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Crosscultural and Interdisciplinary Research in Elementary Education	6. 最初と最後の頁 71,87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Midori MORI (Takamatsu)
2. 発表標題 The Dramaturgy in a Classroom
3. 学会等名 SNUE (ソウル教育大学) 73rd anniversary International Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Midori Takamatsu
2. 発表標題 Support System for Children with Learning Difficulties in Elementary Schools in Japan
3. 学会等名 DNUe International Conference on Slow Learners (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 弓削洋子、弓削洋子、岸野麻衣、家近早苗、樽木靖夫、時岡晴美、水野治久、伊藤美奈子、松嶋秀明、澤田匡人、加藤弘通、岡田涼、赤木和重、山本真帆、大久保智生、藤澤文、安達智子、牧郁子、高木亮、金子泰之、高松みどり、瀧野揚三	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 160頁
3. 書名 教師として考えつづけるための教育心理学 多角的な視点から学校の現実を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考